

## 教育改革の時代と生涯学習実践の課題

－ボランティア活動を中心にして－

讃 岐 幸 治  
(愛媛大学)

### はじめに

わが国でも、産業化がすすむなかで、制度的に学校が教育を独占しはじめ、そこで与えられるものだけが教育的に価値のあるものとみなされるようになってきた。学校は、唯一の教育の場として、子どもたちを受験競争にあおりたて、管理、統制する場となってきた。1970年代頃から、受験競争の激化、偏差値教育による弊害が顕在化しはじめ、登校拒否、校内暴力、いじめ、中途退学などの病理行動が多発化してきたのである。

これらの解決が急がれたが、問題の根源は学校による教育の独占化にあることから、対処療法的な処置では解決できるものではなく、学校教育システム自体を変革することなしには、その根本的な解決はありえないとの認識が広がってきた。「今、学校を変えなければ」との思いから、1984年に発足した臨時教育審議会は、3年間の審議を重ね、つぎのような21世紀における教育改革の方向を提示した。つまり、子ども中心の教育、学校中心の教育からの脱皮をめざして、「学校教育中心」から「学びたいときに、学びたいことが、だれでも学べる」生涯学習社会への移行を打ち出したのである。

学校教育は、生涯学習社会における数多くある教育機関、教育知識を提供する機関のなかの一機関として位置づけられた。そして、その実現化をめざして、学校週5日制、中高一貫教育、開かれた学校、社会人入学、学社連携・

融合などの導入がすすめられているところである。

ところで、こうしたさまざまな教育改革がすすめられているなかで、学校教育の生涯学習化という点で、最も関心を集めているのが「総合的な学習の時間」(以下、総合的な学習と呼ぶことにする)の新設であろう。特に下記の三点から注目されている。

一つには、急激に変化する社会のなかにあっては、「特色ある教育、特色ある学校づくりの推進」なしには、学校自体生き残れない。「特色ある学校づくり」の象徴的な時間として、総合的な学習は、「地域や学校の実態に応じ、各学校が創意工夫を十分発揮して展開する」ことが期待されている。二つには、生涯学習の基礎となる「生きる力」を育むため、学校から地域に出て、自然体験やボランティアなどの社会体験、体験的な学習、問題解決的な学習などが積極的に展開される時間として設定されている。さらに三つには、地域の人びとや保護者が、ボランティアとして教育内容や学校経営に参画していくことが強く期待されているのが総合的な学習である。

「特色ある学校づくり」、「地域を開く学校づくり」、「地域に開かれた学校づくり」といった点で、総合的な学習は教育改革の目玉として、いま注目されているわけである。

そこで、教育改革のなかでも総合的な学習の導入に焦点をしばって、それがきっかけとなって、またそれへの対応として、地域の人びとのなかに多様な学びの場づくり活動がどう広がりはじめているか、学習支援ボランティア活動がどのように変わりつつあるか、その動向に着目しながら、今後の生涯学習実践の方向を探っていくことにする。

## 1. 多様な学びの場づくり活動

生涯学習の推進のために、どの地域でもいろいろな学びの場や機会を設けようと努力してきた。豪華な文化ホールや図書館などがみられるようになった。これは大事だし、必要なことではある。しかし、学びの場や機会といえば、すぐに公民館や図書館、あるいは民間のカルチャーセンターなどをイメージし、学びの場や機会はそういうものだと固定的にとらえる傾向にある。

こうした考え方を持っている限り、多種多様な学びの場や機会のある生涯学習社会をつくりだしていくことなどできそうもない。

最近の動きとして、自らの創意工夫によって学びの場や機会を生み出していこうとする活動が盛んになりつつある。一般にボランティア活動といえば、額に汗して直接に他者や社会のために働きかける活動をまず想定するが、そうした活動を支える活動もボランティア活動であろう。学びの場や機会を見つけ出したり、学習とは縁遠かった場所に学習機能を付け加えて学びの場にしていこうとするボランティア活動が起こってきている。

特に、総合的な学習が一つのきっかけになって、それへ対応していくために、公的な学習施設や場所の「開放」を積極的にすすめていく一方、ゴミ処理場などを学びの場として改装したり、個人の仕事を学びの場として提供するなど、学びの場の「開拓」がはじまっている。さらには、新たな学びの場を共同して「創造」していこうという動きもみられるようになった。学びの場は与えられるものだけでなく、自分らがつくりだしていくものだという意識や活動が起こり、多様な学びの場がつけられつつある。

#### (1) 学びの場の「開放」活動

総合的な学習では、日常的に慣れ親しんでいる川や城跡などを教室にして、自然体験、社会体験、観察・実験、見学や調査などの体験的な学習や問題解決的な学習が行われることが多い。それまでは見過ごしていたが、それらの場所が学校の教育活動として活用され、教育的な価値のあることが発見されたことをきっかけにして、それらを学びの場として整備していこうとする機運や活動が急速に高まりつつある。たとえば、専門家向けに書かれていた城跡の案内板を、子どもでも理解できる文章に変えたり、車椅子からも見られる位置に変更したりしている。また、里山の樹木に名札をつけるなど、山や川などを学習環境としてとらえようとする意識や活動が生まれている。

また、公民館、図書館など社会教育施設も、総合的な学習がきっかけになって、住民にとってより身近な施設に変わりつつある。たとえば、公民館でのIT講習会で小、中学生が学校で習得したITの知識・技能を使って高齢者などに教えている。図書館にしても、子どものもつ課題に適切なアドバイスや資料を与える必要が高まり、単なる貸出し事務だけではすまなくなっ

きた。そうした流れのなかで、図書館などの社会教育施設も、その役割機能を見つめなおし、地域に「開かれた」施設として、病院患者や障害を持った人、あるいは乳幼児を持った母親などに対してより「開放」をすすめてきている。

これらの社会教育施設だけでなく、総合的な学習では、社会福祉施設、保健所、林業試験所、消防署、植物園、放送局や新聞社などを訪ね、そこを学びの場として見学・調査や体験的な学習をすることも多くなった。それらの施設のなかには、社会教育施設以上の学習機能を備えたものが数多くあるにもかかわらず、これまで、仕事の邪魔になるなどの理由から、学びの場として開放することに躊躇しているところも少なくなかった。それが、子どもたちの学習のためならばと開放したことをきっかけに、一般の住民にも学びの場として開放する施設が増えはじめている。

今後は社会教育施設の開放だけでなく、保健所や水産試験所などの施設も地域の人びとに積極的に開放し、住民の学びを支援していくように働きかけていくと共に、住民に対してそれらが持っている学習機能や学習機会などをPRし、だれもがそれらを学びの場として使えるようにしていくことである。そして、それらを生涯学習関連施設としてネットワーク化し、相互に連携協力できるようにしていくことが大事になってきている。

もう一つは、これら公的な施設で教育的に十分に対応していくために、職員の意識改革のための研修が必要であるだけでなく、人びとの学びを支援するボランティア、いわゆる「施設ボランティア」の養成と設置が必要になっている。施設の専門職員などと協力しながら、自らの学習機会としてすすんで教育活動の企画に参加し、教育プログラムの展開において指導助言などをする、そうしたボランティアの養成と彼らの活動がますます必要になってきたといえる。

## (2) 学びの場の「開拓」活動

ところで、最近では、これまで学習とは縁の薄いものと考えられていた病院、駅、農協などを、学びの場として活用していこうとする動きがみられる。廃校を改良して集団宿泊施設にしていく。駅の待合室に写真や絵画などの展示コーナーを設けていくというように、あらゆる場所を、生涯学習の視点か

ら、学びの場として「開拓」していこうとする動きが広がりつつある。

ゴミ処理場は、これまで学びの場とは考えられていなかったが、環境学習のためにそこを利用する人が多くなるにつれて、ゴミ処理場に対する考え方が変わってきた。子どもや教師のアイデアを取り入れながら、ゴミ処理場を環境学習センターにつくりかえる。同じように郵便局の一部を改修して郵便や電信の博物館に、農協の一室を地域の農業の歴史や特産品づくりの過程の学習できる場にするなどして、職員がボランティアとして展示物などの整理をしたり、必要に応じて説明する施設や機関が増えはじめている。いろいろな場所が学びの場として開拓されつつある。

さらに注目すべきは、地域の人びとのなかに、だれもが利用できる学びの場を提供しようとする動きが起こってきたことである。総合的な学習では、たとえば、パン工場を見学し、パン作りの体験をしたいと、個人経営のパン工場を利用させてもらう。工場の側からすれば、車椅子を利用する子どもたちのために、車椅子で通れるように工場内の通路周辺の荷物を片付けたり、車椅子でもパン作りの体験が気持ち良くできるように環境を整えてやらなければならない。個人の仕事場に子どもたちを受け入れるのは、大変な苦勞をともない、かつてはごく限られた人たちだけだった。

ところが、学びの機会として職場を開放してみたら、子どもたちと触れ合えるし、職場が学習の役に立ち、自分たちの仕事に誇りが持て、社会的な意味づけも確認できるなどといったメリットも大いにある。そうした考えから、最近では自宅や職場などを開放する人が増えてきた。いやより意識的に学びの場として活用できるように自宅や職場に創意工夫をこらし、それを積極的に提供するボランティアが増えつつある。

流通問題の体験学習のために子どもを受入れる商店主、乳搾りの体験学習の場を提供している酪農家、休耕田を子どもの遊び場やゲートボール場に提供する人、商店の一角を改造して図書館の貸出し本を置くコーナーを設置する人、空き倉庫を音楽ホールに改良して高校生などのバンドに提供している人、自宅を開放して子ども文庫・家庭文庫を開く人も現れてきた。また、中古の車椅子を修理して東南アジアへ寄贈しようとしている高校生ボランティアのために、修理場所を提供している工場主など。ボランティア学習のために場所や資材を提供していく人も現れている。こうした傾向にある。

生涯学習社会は、地域のあらゆる場所、生活の場が学びの場になっていく社会である。近年、これまで学びの場とは縁遠いものとされていた施設や機関も学びの場として活用しやすくなったし、自宅や仕事場などを学びの場や機会として自主的に提供する人たちも増える傾向にある。そうした機運をさらに高めるとともに、それらについての情報収集・提供のできる体制を整えていくことが大事になってきている。

### (3) 学びの場の「創造」活動

さらに、より適切な学びの場を新たにつくっていかうとする活動が起こってきている。学びの場を創造する活動である。寄贈本を集めての図書館づくり、山林を切り開いての遊園地づくり、自然体験学習の拠点としての山小屋づくりなど、子どもたちと一緒に学びの場をつくる活動が盛んになっている。

「地域に密着した福島潟活動」の単元開発に取り組んでいる新潟県豊栄市立太田小学校の場合もその典型的な例であろう。福島潟をフィールドにした自然体験学習を深めていくなかで、子どもたちが「学校ビオトープ（ミニ生態圏）」づくりをはじめた。それに共感した地域の人たちが、ボランティアとして協力していくなかで、学校を支援する団体（教育振興会）を組織し、それが中心となって今や地域をあげて池と森とを中心とした壮大な学校ビオトープ「太田の森」をつくりあげていこうとしている。つぎのような5ヵ年計画である。

平成11年度－「太田の森」構想の策定、池と水路の工事。平成12年度－森林体験活動、「太田の森」の植樹作業。平成13年度－ホテル体験活動、ホテル水路工事。平成14年度－昆虫や鳥の生態観察、雑木林の整備。平成15年度－木工体験活動、間伐材での遊具づくり。つまり、学校ビオトープ「太田の森」を、最終的には地域の生涯学習の場、環境問題の提供の場、地域コミュニティの場にしていこうとする取り組みである。まちづくりと関連して、多様な学びの場づくりがすすみつつある。

これまで学びの場や機会は与えられるものという考え方が強かった。しかし、総合的な学習などが一つのきっかけとなって、住民のなかに学びの場に対するイメージが変わってきた。学びの場は与えられるものだけでなく、自

らの力できつくりあげていくものだという意識が生まれつつある。学びの場にしても、社会教育施設などの利用だけでなく、積極的に学びの場を「開拓」したり、「創造」していこうとする動きが活発化しつつある。こうした動きこそ、生涯学習社会づくりにおけるボランティア活動としてとらえていく必要がある。

## 2. 多様な学習支援ボランティア活動

生涯学習社会は、「いつでも、どこでも、だれもが学習できる」社会であるが、それは逆にいえば、「いつでも、どこでも、だれもが他者の学習を支援していく」社会である。「教える人」と「学ぶ人」に固定化するのではなく、だれもが教え会い、学び合う社会のことである。したがって、生涯学習社会化のためには、地域のなかに他者の学びを支援していく、いわゆる「学習支援ボランティア」がつつぎつつぎ生まれ、あらゆる領域で活躍できるしくみや風土がつくりあげていく必要がある。

ところが、これまでややもすれば他者の学びを支援できるのは、教師のような専門的な知識・技能、資格を持っている人だととらえる傾向にあった。そのため人材バンク制度に登録を呼びかけても、名乗りをあげる人は少なく、一部の特定の人たちだけが公民館などの講座の講師をつとめ、他の人たちは何時も受講生という構図であった。

こうした流れであったが、総合的な学習をはじめ学校の教育活動が地域の人たちの学習支援を必要とする機会が増えてきたことで、「依頼活用型」から「提案外向型」へ、さらには「企画協創型」の学習支援ボランティアへと発展しつつある。特定の人たちだけでなく、だれでもやれるという意識が生まれ、また依頼されたから引き受けるものでなく、自らの特技や持ち味を発揮して役立てるのが学習支援ボランティア活動だという意識が生まれつつあるといえる。

### (1) 「依頼活用型」の学習（支援）ボランティア

地域の人が総合的な学習などにかかわった経緯をみると、初期の段階では

地域の人たちの方から申し出たわけではなく、学校から要請されたから引受けたというのがほとんどである。学校が設定した学習プログラムを遂行していく上で、その学習を支援するに必要な知識や技術などを持っている適当な人を、人材バンクやPTAなどを通して得た情報から選びだし、その人に依頼して学習支援ボランティアとして手助けしてもらおうというやり方である。

お呼びがかかり「活用」される人は、小学校、中学校、高校や公民館講座でも、環境学習はゴミ問題に詳しいAさん、福祉学習は手話のできるBグループというように、特定の人だけになりやすかった。そうした人だけが、学校教育の実態にも詳しくなり、学校との信頼関係もでき、再三依頼され次第に専属的な存在としてかかわるようになっていく。

学びを豊かにするためには、いろいろな知識・技能や経験・生き方を持った多様な人びととの触れ合いや支援が大事だし、また数多くの住民の出番をつくりあげることの重要性からすれば、特定の人だけでなく、多様な人材を掘り起こしていく必要がある。しかし、数多くの住民の出番をつくらうとしても、だれがどのような知識・技術・持ち味を持っているのかわからないし、見つけ出し依頼しても自分は自信がないからと引き受けたがらない。

では、どう人材を掘り起こしていけばいいのか。人材登録制度をつくっても登録する人が少ないように、人材というのは教師や医者などの一定の資格を持ったり、特定の専門的な知識・技能を持った人だというイメージを持つかぎり、地域の人たちから多彩な人材を探しえないのではないかと。また地域の人たちから、この分野では生活の名人、達人だと認められ、自信や誇りを持つことなしには他者の学習を支援しようとする気持ちにはなりにくいものだ。地域は人材の宝庫、いやだれもが人材になりうる宝庫だという考え方に切り換え、住民のだれもが持ち味に磨きをかけ、多様な人びとが学習支援ボランティアとしてかかわっていきけるようなしくみや風土をつくりあげていくことが必要である。

そうしたしくみや風土づくりの方法として、宮崎県綾町の「一人一品」運動のようなすすめ方が参考になろう。それは、住民一人ひとりが自己実現をめざして、それぞれの持ち味に磨きをかけ、だれもが生活の名人、達人をめざしていく創作学習活動運動である。幼児は折り紙づくりに挑戦する。ある人は手話の達人、ある人は語り部や古文書解読の名人、ある人はパソコンの

達人、水問題の専門家、漬物づくりの名人をめざしての生涯学習をすすめていくのである。現在、一人一品でなく、二、三品提出する人も多くなっているが、各人が名人や達人をめざして一年間かけて努力して磨き上げた成果を公民館に出品し披露しよう。会場で各人の努力の成果・磨き上げられた作品を見せあうなかで、来年はもう少し頑張ってみようと思欲をもつことになるし、だれがどのような特技や専門的な知識を持っているか、地域のだれもが知る機会になっている。だれもが何らかの名人、匠、達人であることが自他ともに認めあう機会になっている。

こうした活動が展開していけば、あらゆる領域に名人や達人がいることになり、多様な人びとに学習支援ボランティアとしてかかわってもらうことができる。人材はいるであろうが、これからはそれ以上に人材が育つような風土やしぐみをつくっていくことである。

## (2) 「提案外向型」の学習支援ボランティア

ところで、ボランティア活動への関心が高まるなかで、もう一人の自分探しや生きがいを求めて、自らの知識・技術、経験や学習成果を積極的に他者や社会のために役立てようとする人びとが増えてきた。活動分野も福祉、環境、文化、まちづくりなど生活のあらゆる分野に広がり、だれもが、いつでも、やれる活動だという意識が生まれてきた。

かつては学校の依頼があれば、学校の設定したプログラムにしたがって自分なりの役割を演じる「依頼活用型」がほとんどであったが、ボランティア意識が高まるにつれて、自分たちの持っている知識・技術や特技・持ち味が学校教育のなかに生かせないものだろうか、住民の側から学校に出向き申し出る「提案外向型」の学習支援ボランティアが増えてきている。

たとえば、「何でもやってみよう隊」といったPTAのグループのように、子どもたちの学習のために役立つことなら、それぞれの知識や経験などを積極的に出し合っていこうという動きが活発になっている。自分たちの特技や持ち味などが学校教育に役立たないかと、学校と交渉して、「朝の会」に毎朝、当番で出向き本の読み聞かせをする読書グループ、魚食に親しんでもらおうと幼稚園や学校に出向いて、魚料理の仕方などを教えている魚食普及の会など、いろいろなグループが学習支援ボランティアとして名乗りをあげるよう

になってきている。環境問題や福祉問題、伝統文化保存などに取り組んでいるグループなどのなかには、学習プログラムまで開発し、自己研修を重ね、力量のある学習支援グループさえ生まれている。

住民のなかにすすんで学習支援を希望するボランティアが増えてきたが、新たな問題が起ころはじめている。一つは、例えば環境学習に造詣が深く、それらの知識・技能などを生かして学習支援をしたい人やグループの希望と、学校の教育活動や時間割などとの調整をどうはかるかという問題や、環境学習にかかわるボランティアグループが数多く学習支援ボランティアとして名乗りをあげて来た場合、どのグループに依頼するかという問題がある。今後は、それらの問題を解決していくために、コーディネーター機能を担える人の養成とともに、オプション方式による選択の仕方などを工夫していく必要がある。

さらに、自分たちの特技や持ち味を役立てたいという意欲があったとしても、その活動が子どもの学びにとってマイナスに働いたのでは両者のとって不幸である。学校の教育方針や学級経営のあり方、子ども理解などについて研修する機会などを設ける必要がますます高まってきている。

### (3) 「共同創造型」の学習支援ボランティア

学習支援ボランティアは、学校教育との関連でいえば、学校が依頼し活用する「依頼活用型」からはじまり、ボランティア意識が高まるなかで、住民の側から積極的に学校に働きかけて活動する「提案出向型」に向かいつつあるが、近年の特徴として「共同創造型」の学習支援ボランティアが目立ちはじめている。

これからは、何が子どもたちにとって大事か、そのために学校は何ができるのか、地域の人びとができることは何か、学校と地域の住民とが協議しながら、計画を練りあげ、だれがどこを分担していくかを決めて、相互に協力しあいながら運営にあたっていくことが重要になってきた。通学合宿や学社融合の流れのなかで、総合的な学習においても計画立案の段階から学校と共同しながら取り組んでいく「共同創造型」の学習支援ボランティアが一般化しつつある。これは参画型の学習支援ボランティアと呼んでもいいだろう。

ところで、ここで問題になるのは、どこが共通の話し合いの場を設定する

か、だれが双方のコーディネートしていくかである。学校側に期待するのは難しく、また、地域のどこが中心になって働きかければいいのか決めにくいし、各学校毎のPTAだけでは荷が重すぎるといったことから、「共同創造型」の学習支援ボランティアとして生み出し、活躍しやすい風土やしきみをつくらうとする動きが起ってきている。

たとえば、愛媛県松山市では、PTAが音頭をとる形で子育ての支援を目的とするPCA (Parent-Citizen Association) 研究所(仮称)を設立しようとしている。それは、市民、企業・公民館・学校(幼稚園から大学まで)・青少年育成団体・セルフサポーター団体などを構成メンバーにして、地域における子育て支援だけでなく、「総合的な学習」の人的・情動的支援を実りあるものにするための機関である。

そこでは、つぎのような機能を持ったものにしようとしている。1). 需要調整機能－ニーズは個別的であるため、専門性を要する幅広い知識や情報ネットワークをもった人材をコーディネーターとして配置。2). 活動支援機能－支援活動がうまく行われるためには側面からの支援が大事であることから、専門別のエキスパートの組織化などを図っていく。3). 情報収集・提供機能－要望に応じた情報収集、各分野の情報の発信基地としての機能を持つ。4). 人材育成機能－子育てをトータルな立場からとらえ、各種団体・機関施設との連携・協力しながら、市民が幅広く子育てに参加していく体制をつくりあげていく一方、数多くの学習支援ボランティアを養成・確保していく。

財政上の課題もあるが、それは市民・企業・団体・行政の理解と援助でもって、乗り越えようとしている。こうした動きがみられる状況にある。

総合的な学習にしぼって、それを一つのきっかけとして生涯学習実践に新たな動きがみられつつある状況に触れてきたが、それらの新しい動きに対応して、さらなる課題が生まれつつあるといえる。

#### <参考文献>

- 1) 天野郁夫『教育改革のゆくえ』東京大学出版会, 1995
- 2) 教育課程審議会答申「教育課程の基準の改善の方針Ⅰ, Ⅱ」1998
- 3) 讃岐幸治・住岡英毅編『生涯学習社会』ミネルヴァ書房, 2001